

## 〈 2. 特集 行く・読む 〉

## 作法の社会学的研究に向けて

——記号学的分析による日常的場面における作法の評価から——

山根一郎『作法学の誕生』

(春風社、2004 年)

難波 美喜

「マナー」とは、行儀・作法・礼儀のことであり、一般的にテーブル・マナーや冠婚葬祭でのマナーなど、特別なルールや規則の体系を指して用いられることが多い。そうした意味でのマナーは、日本では江戸時代に、多様な人々が生活の中に芸能・文芸をさまざまな形で取り入れることにより高度な発達を遂げた。例えば、茶道や花道などを通して礼儀作法としてのマナーや社会的コミュニケーションを行うための美的方法などを身につけることにより、「文化」が生み出されるとともにネットワークが多様化し「社会関係資本」をも促進させた。

このマナーを社会学的に研究する際、主に次の二点が研究対象とされてきた。一つ目は、階層的側面である。P. ブルデューの研究によると、社会的支配関係は、「第一次ハビトゥス」が影響しており、支配階級と被支配階級との社会的地位などの差異を再生産していくということを論じている。そして二つ目は、ジェンダー的側面である。A. ホックシールドが女性の感情労働について論じているように、現代においてもマナーは「女性らしさ」と深く関係しており女性に強く求められている。これらの研究からも分かるように、マナーは支配や抑圧といった問題と結び付いており、批判的に捉えられてきたと言える。

しかし、マナーには、日常的側面もある。これまで十分に論じられてこなかったが、こうした広い意味でのマナーには、身のこなし方やしゃべり方、気遣いなども含めて考えることができる。このような意味でのマナーは、私たちの日常生活の様々な場面において、ほとんど強制的な感覚を感じることなく自然に行われていることが多い。現代、若者のマナー不作法やコミュニケーション能力の低下、グローバル化による異質な他者との出会いの増加などが問題となっており、他者といかにしてより良い関係を築くかに関心が高まっている。そのための有効な手段として、日常的側面におけるマナーに関心が寄せられていると言える。

マナーのこうした日常的側面に注目した、おそらくは最初の社会学的研究となるのが、本書である。著者の山根一郎の専門は社会心理学で、研究テーマは(対人)心理的距離であり、作法とは接点がない。もともと著者は作法というものを冷笑反発していたが、あるとき、作法に対する無知を露呈してしまったことを機に作法を習い、「小笠原宗家礼法総師範」を取得した。

本書では、著者自身が実際に「小笠原宗家礼法」で学んだ教えを、ロラン・バルトが『モードの体系』(1967 年)のなかで用いた記号学的分析のアプローチを用いて分析している。具体的には、個々の作法の真の根拠や価値観(イデオロギー)を抽出したうえで、作法の構

造は静態的なものではなく、作法には「時宜 (TPO)」があること、また、作法はそれぞれのアクターの所作や場面、ジェンダーなどの軸によって、常に変化し得る動態的なものであるという主張を行っている。

本書の構成と概要は、次のとおりである。本書は三部構成になっており、第一部では、作法の定義がこころみられる。著者は作法を「目に見える所作とそれに対する社会的評価からなる」(本書: 29) と定義している。つまり作法とは、ただ機械的に既存の所作を行うことではなく、作法に準拠する価値観に従うことなのである。また、作法は「立ち居振舞い」ともいわれるように所作あるところ必ず作法がありうるのであり、歩き方や物の持ち方、運び方など身体の骨格・筋肉構造上の力学的側面も存在するのであり、対人場面での相手に対する所作だけには限らない。

このように作法を定義したうえで、著者は、作法には社会的に強制された側面があり、そこから生みだされる問題点があると指摘している。たとえば、ある社会において支配的な作法があるとして、その作法に内在する価値観を否定した人は「不作法者」として扱われ、その人自身の道徳性や社会常識が疑われてしまうといった危惧はつねに存在している。そこで著者は現行の作法を批判する視点をもつためにも、作法をいくつかの要素に分類し、「このような状況 (条件素) のもとで、ある所作を行う (行為素) と、このような働き・効果 (機能素) があり、評価 (評価素) される」といったルールを抽出することをこころみた (本書: 32)。一例を挙げるなら、大学の講義室には、「授業中に私語をするのは周りの迷惑となるからやめなさい」というルールが存在する。同様に、小笠原流礼法でも、「作法とて、目に立つならばそれをも不躰」という言葉に示されているように、いかにも厳格に作法どおりに振舞うことでかえって人目についてしまうのは、場を共有する人に対して失礼に当たるとされており、ある状況 (条件素) の下での実行可能な所作には、「最適 (理想)」、「許容範囲内 (許容)」、「許容範囲外 (禁忌)」の三群があると著者は論じている (本書: 44)。

さらに、著者は、そもそもそうした社会的強制力の源泉は何かという問いを投げかける。それについて著者は、作法は「強い権威」をもたないと社会的に受容されないことを指摘し、「小笠原流」、「英国王室」など作法が準拠している特定の権威を「権威素」と名付けた (本書: 45)。この点について評者は、全ての作法において「強い権威」が必要であるという著者の考えには同意しない。特にある特定のルールや規則の体系を指して用いられる作法の場合には権威が必要とされることが多いが、日常的な場面における作法には、その場その場で形成されることが多く権威はさほど重視されない傾向があるからである。

第二部では、テーブル・マナーと男性ファッションを例にして、既存の作法書を題材に、作法と「格」の問題について論じている。そもそも格とは、信頼性の表現として尊重されるべきものであり、作法がなされる場やそこでの所作においても存在する (本書: 153)。しかし、格は権威と深く結び付いているものであるが不変的なものではないのであり、作法を凝固まったものとして形骸化させないためにも常に検討していくことが必要なのである。

第三部では、女子大学生による電車内の乗客の振る舞いについての観察・評価のデータを

もとに電車内という日常的な場面での禁忌・理想とされる振る舞いの構造や価値観をあぶり出すことをこころみている。この女子大学生による調査は、都市の電車内空間というパーソナル・スペースの相互侵犯状態であり、作法違反が生じやすい場面に限定して行われた。毎日多くの人々が利用し、性別、階層、年齢などがそれぞれ異なる日常的空間に焦点を当てることで、実際に、どのような規範的な特徴が存在しているのかということを考察している。

研究の結果、観察課題が「姿勢」の美的評価ということもあるため、身なり（衣服や装飾品等）よりも身体と行為の方が評価の判別に寄与していた。そして全身姿勢（座位～立位）の比較では、座位よりも立位の評価が高い。読物の比較では、「大衆雑誌→文庫本→カバー付き」の方向で評価が上がる。また、「膝組み」に関しては、ラッシュ時でなければ美的評価になり、ラッシュ時では非美的評価になる場合があるなど、評価に混雑状況が影響していることが分かった。さらに、中年女性で所作が好ましくないより非美的評価度が高くなり、美人で所作も適切であればより美的評価が高くなるといった「光背効果」のバイアスもみられた。

これらのことから、電車内は「公開空間」であり、ゴフマンの「儀礼的無関心」の規範に基づく厳しい視線の作法が要求され、動作や音を控えて存在感を最小にしなければならない空間なのである（本書：206）。したがって、接触してほしくない当人の個人領域を侵すといった「プライバシーの侵害」や接触したくない相手の個人領域をさらすといった「プライバシーの露呈」を避けなくてはならない。また、男性対象者に対しては「男らしさ」という表現をあまり使用していないのに対して、女性対象者には、自他への気配りや控えめ、視覚的美しさを満たす「女らしさ」というジェンダー的表現がかなり頻繁に使用されていた。そしてなによりも男女間で評価に大きな違いが生じたのが、脚の開き具合と座席での態度であった。

本書は、他の多くの作法の書籍ではあまり取り上げられていない「日常的な場面での作法」をもとにした分析を行うことにより、作法というものを日常といった私たちの身近な生活場面と結びつけている。それにより、作法を遠いものではなく常にあらゆる所で存在しうるものとして認識することに働きかけている。またそれと同時に、何気なく行っている日常的所作が暗黙のうちにいかに他者から評価されているかということを明確にしている。本書は、真の意義や価値観などを理解されぬまま現行されている作法を見直し、作法の構造を社会学的に紐解いている。そしてそれにより、現代の非日常的な場面のみならず、日常的な場面での作法の具体的な事例研究への取り組み方や伝統的作法をもとにした新たな認識の広め方への大変すぐれた社会学的視点を提供してくれる。評者は、これらの視点をもとに「マナー（作法）」を研究していきたい。